

子どもたちをわたしのところに

マルコの福音書 10章 13-16節

はじめに

今日はこの後、「子ども祝福式」があります。子ども祝福式の原点は、今日の聖書箇所にあるように、イエス様が子どもたちを祝福されたことにあります。

ここにいる皆さんの中には、結婚して子どもがいる方もおられます。小さい子どもがいる方もいれば、子どもがすでに大人になっている方もいるし、子どもが自立してすでに新しい家庭を作っている方もおられると思います。

イエス様は、「**子どもたちを、わたしのところに來させなさい**」と言われました。私たちは自分の子どもたちを、イエス様のもとに連れて行かなければなりません。小さな子どもたちだけでなく、すでに大人になっている自分の子どもたちも、イエス様のもとに連れて行かなければなりません。

また親だけでなく、教会学校の教師たちも、子どもたちをイエス様のもとに連れて行かなければなりません。子どもたちをイエス様のもとに連れて行くことこそ、教会学校の教師の本質的な奉仕です。

また子どもたち自身も、自分の意志でイエス様のもとに行かなければなりません。自分でイエス様を信じる信仰をもって、イエス様のもとに行かなければなりません。

イエス様は、御自身のもとに来る子どもたち、連れて来られる子どもたちを、喜んで祝福して下さるのです。

1. 子どもを祝福されるイエス

ある時、人々が子どもたちをイエス様のもとに連れて来ました。イエス様に手を置いて祝福してもらいたかったからです。おそらく子どもたちの親が、自分の子どもの健康や成長、将来の祝福を願って、イエス様のもとに連れて来たのです。

しかし弟子たちは、その親や子どもたちを「**叱った**」というのです。イエス様のもとにはいつも、病人や悪霊につかれた人などが連れて来られました。しかしここに連れて来られた子どもたちは、何の問題もない、元気でわんぱくな子どもたちだったのでしょう。弟子たちとしては、イエス様は病人や悪霊につかれた人などを癒すことで忙しい、元気でわんぱくな子どもたちなど相手にしている暇などないと考えて、親や子どもたちを叱ったのかもしれない。

しかしイエス様は、親や子どもたちを叱る弟子たちに憤り、「**子どもたちを、わたしのところに來させなさい。邪魔してはいけません**」と言われて、「**子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて**

祝福された」のです。

イエス様はなぜ子どもたちを大切にされるのでしょうか。14-15 節でイエス様はこのように言われます。「**神の国はこのような者たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。**」。

イエス様が子どもたちを大切にされる理由は、神の国は子どものような者たちが入るところだからです。神の国は、「天国」や「永遠のいのち」と言っても良いかもしれませんが、神の国にとって、子どもたちは「見本」なのです。神の国にとって、子どもたちは「先生」なのです。私たちは、神の国の入り方を、子どもたちから学ばなければならないのです。その意味で、子どもたちは大切な存在なのです。

教会にとっても、子どもたちは大切な存在です。子どもたちは時々、礼拝で騒いだりわがままを言ったりするかもしれませんが、イエス様は子どもたちから学びなさいと言われます。特に、神の国の入り方については、子どもたちから学びなさいと言われるのです。もし教会に子どもたちがいなかったら、私たちは神の国の入り方が分からなくなってしまうかもしれません。教会に子どもたちがいるからこそ、私たちは神の国の入り方を何度も思い返すことができるのです。その意味で、子どもたちは教会に必要な存在なのです。

2. 子どものように神の国を受け入れる

イエス様は、「**子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません**」と言われました。そして神の国は、子どものように神の国を受け入れる者たちのものだと言われます。では、「子どものように神の国を受け入れる」とは、一体どういうことでしょうか。このことについては、様々な意見があります。素直に神の国を受け入れるとか、へりくだって神の国を受け入れるなどと言われます。しかし私自身は、「子どものように神の国を受け入れる」とは、「自分の無力さを認めて、ただ信仰によって神の国を受け入れること」だと思います。

子どもというのは、無力です。力のない存在です。体力もないし、学力もありません。技術や能力もありませんし、経済力もありません。その意味で、親の保護がなければ生きていけません。親に頼って、親に守られて生きているのが、子どもです。子どもは、親の保護の中で、少しずつあらゆる力を身に着けていきます。学校に通って、体力や学力を身に着け、技術や能力も身に着けていきます。そしてあらゆる人間関係を通して、人間力を身に着け、仕事を通して経済力も身に着けていきます。そうしてやがて親から自立していくのです。

しかし神の国においては、大人のようにあらゆる力を身に着けることではなく、子どものように無力であること、ただイエス様を信頼し、頼ることが求められるのです。神の国に入るには、自分の無力さを認めて、イエス様に頼り切ることが求められるのです。神の国においては、私たちが身に着けたあらゆる力が邪魔になるのです。私たちが身に着けたあらゆる力が、神の国に入る邪魔をするのです。

旧約聖書のヨブは、「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」(ヨブ記 1:21)と言いました。生まれたばかりの子どもは何も持っていません。その子どものように、何も持たずに、ただイエス様への信仰だけを持って入る、それが神の国なのです。

今日の聖書箇所のおすぐ後の 17 節以下で、ある金持ちがイエス様のもとに訪ねて来て、「永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいでしょうか」と言いました。彼は、少年の頃から律法をすべて守ってきた真面目な人でした。そして仕事をして財産もたくさん手に入れた人でした。しかし彼はイエス様に、「あなたには欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい」と言われました。すると彼は、顔を曇らせて、悲しみながら立ち去って行ったというのです。

彼には、あらゆる力がありました。経済力も道徳的に良い行いをする力もありました。しかし子どものようになることはできなかったのです。子どものように無力になって、ただイエス様だけに頼ることはできなかったのです。彼は自分の経済力や良い行いに頼ることをやめることができなかったのです。彼は大人であることをやめられなかったのです。子どものようになること、イエス様だけに頼ることを恐れたのです。

3. 子どもたちをイエスのもとに

私たちは、順風満帆な時は子どものようになることを恐れます。しかし逆境の時、試練の時は、子どもようになります。つまり無力になるのです。私たちの人生には、自分の力ではどうにもならないことがしばしば起こります。病気になったり、事故や事件に巻き込まれたり、災害にあったり、今回の新型コロナウィルスもその一つだと思いますが、私たちの経験やお金や良い行いなどが何の役にも立たない、そういうことがしばしば起こります。その時に私たちは、無力になり、子どもようになります。そしてただイエス様に祈るほかない、頼るほかないという状態になります。

聖書の中には、自分の無力さを認めて、子どものようにイエス様のもとに訪ねて行った人々が多く紹介されています。その中で、子どものように無力になって、自分の子どもをイエス様のもとに連れて行った親たちがいます。

一人は、「会堂司のヤイロ」という人です。この人は、ユダヤ教の指導者でした。その意味では、律法を厳格に守り真面目に生きてきた人でした。彼には、12歳の一人娘がいました。しかしその娘が病気で死んでしまったのです。彼は、イエス様の前にひれ伏して、娘の上に手を置いてほしいと願うのです。そうすれば、娘は生き返るかもしれないと考えたからです。

そんな彼に対して、イエス様はこう言われます。「**恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば娘は救われます**」(ルカ 8:50)。そうしてイエス様は、彼の娘を生き返らせたのです。彼は、自分の娘の死に対して全く無力でした。自分の良い行いも、宗教的立場も全く役に立ちま

せんでした。彼は、イエス様に頼るほかありませんでした。まさに子どもでした。そんな彼に対して、イエス様が求めたことは「信仰」だけでした。そしてその信仰のゆえに、彼の娘を生き返らせたのです。

二人目は、「カナンの女」です。彼女は、ユダヤ人ではなく異邦人です。彼女には幼い娘がいましたが、その娘が悪霊につかれています、ひどく苦しんでいたのです。そこで彼女は、イエス様の前にひれ伏して、娘から悪霊を追い出してほしいと願うのです。

しかしイエス様は最初、彼女の願いを退けます。御自分の使命は今、異邦人ではなく、ユダヤ人にあるからだと言われます。しかし彼女は諦めず、「**主よ、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます**」(マルコ 7:28)と言います。するとイエス様は、彼女にこう言われます。「**女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりに**」(マタイ 15:28)。そうしてイエス様は、彼女の娘から悪霊を追い出されたのです。彼女もまた、自分の娘の苦しみに対して無力でした。まさに、イエス様に頼るほかない子どものような状態でした。そんな彼女の「信仰」を見て、イエス様は彼女の娘を癒されたのです。

三人目は、「群衆の一人」で、一人息子が口をきけなくする霊につかれた人です。彼の息子は幼い時から、突然叫んで引きつけを起こし、所かまわず地面に倒れ、泡を吹きながら転げまわり、歯ぎしりをして体をこわばらせます。そして何度も火の中や水の中に彼を投げ込もうとするのです。この息子の父親は、イエス様の前にひざまずいて、「**おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください**」(マルコ 9:22)と願うのです。

そんな父親に対して、イエス様はこう言われます。「**できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです**」(マルコ 9:23)。それに対して父親は、「**信じます。不信仰な私をお助けください**」(マルコ 9:24)と叫びます。そうしてイエス様は、彼の息子から霊を追い出されたのです。この父親もまた、自分の息子に対して無力でした。最初、イエス様の弟子たちに霊を追い出してくれるように願ったのですが、弟子たちはできなかったのです。まさに途方に暮れて絶望に包まれていたのです。そして最後に、イエス様に頼ったのです。この父親に対しても、イエス様が求めたことは「信仰」でした。この父親は、信じ切ることではできませんでしたが、不信仰な自分もイエス様に委ねたのです。イエス様は、その父親の信仰のゆえに、息子を癒されたのです。

この三人の親は、子どものように無力になって、自分の子どもたちをイエス様のもとに連れて行きました。イエス様が彼らに求めたことは一つだけでした。それは「信仰」です。イエス様を信じる信仰です。イエス様を主なる神様と信じ、イエス様に自分の子どもを委ね、イエス様ならこの子を何とかしてくださると信じる信仰です。その信仰のゆえに、イエス様は彼らの子どもたちを癒し、祝福されたのです。

おわりに

イエス様は今日の聖書箇所、「**子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子どものよ**

うに神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません」と言われました。

神の国は、子どものようになれば、誰でも入れるところです。「信仰」さえあれば、誰でも入れるところです。イエス様を主なる神様と信じ、そのイエス様に自分自身を委ねていく信仰さえあれば、誰でも入れるところです。その意味で、子どもでも入れます。子どもたちは、ぜひイエス様を信じてほしいと思います。イエス様に頼って、人生を生きてほしいと思います。イエス様は喜んで受け入れてくださいます。

イエス様は、「子どもたちを、わたしのところに来させなさい」と言われます。子どもを持つ親たちは、また教会学校の教師たちは、子どもたちをイエス様のもとに連れて行かなければなりません。イエス様のもとに子どもたちを連れていく時に大切なのは、「信仰」です。子どもたちをイエス様に委ねて、イエス様ならこの子どもたちを何とかしてくださると信じて、祈り続けることです。

子どもを持つ親たちは、子どものことで心を痛めることがしばしばあります。子どもが何歳になっても（大人になっても）、子どものための心配は尽きないものです。子どもを持つ親にとって大切なのは、「信仰」です。子どもになることです。無力な自分を認めて、ただイエス様に頼り、イエス様に望みを持つことです。そして諦めずに、イエス様に祈り続けることです。イエス様は私たちの子どもを、恵みの契約の中にある特別な子どもとしてくださっています。イエス様が私たちの子どもの神となり、私たちの子どもがイエス様の民となると約束してくださっています。

私たちはその約束を信じて、イエス様が子どもたちを抱き、手を置いて祝福してくださる姿をイメージして祈り続けていきたいと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

教会に子どもたちを与えてくださって感謝します。イエス様は、子どもたちから神の国の入り方を学ぶようにと言われました。私たちが与えられた子どもたちを、子どものような信仰をもって、あなたのもとに連れて行くことができますように。子どもたちにとっての希望と祝福は、イエス様あなたにしかありません。どうかあなたが子どもたちを祝福し、その人生を導いてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。